

5月5日 丸木美術館66周年開館記念日 「変化の途中をデザインする」トーク抄録

久しぶりに行った開館記念日のイベントでは、ゲストコメントーターに『時がつくる建築・リノベーションの西洋建築史』の著者である東京大学大学院工学系研究科教授の加藤耕一さんをお迎えし、wyes architectsの齋賀英二郎さんと八木香奈弥さんに、丸木美術館の改修設計のアプローチについて語っていただきました。司会は当館学芸員の岡村幸宣。トークの抄録をお届けいたします。

成長を続ける美術館

岡村 wyes architects のお二人は、数年前から丸木美術館の建築を調査しながら、写真や資料を読み込み、関係者への聞き取りを行ってきました。この美術館の歴史は増改築の歴史でもあり、積み重ねられた時間の層が形となってあらわれています。誰かが考え、工夫を凝らした痕跡が、矛盾と必然の入り混じるように残されている。この建物のかげがえのなさを、個々人の思い入れではない方法で一般的に共有することができないかと、ずっと考えていました。ゲストの加藤さんは、ご著書のなかで、転用・再利用という建築行為は、長い歴史のなかで当たり前前に繰り返

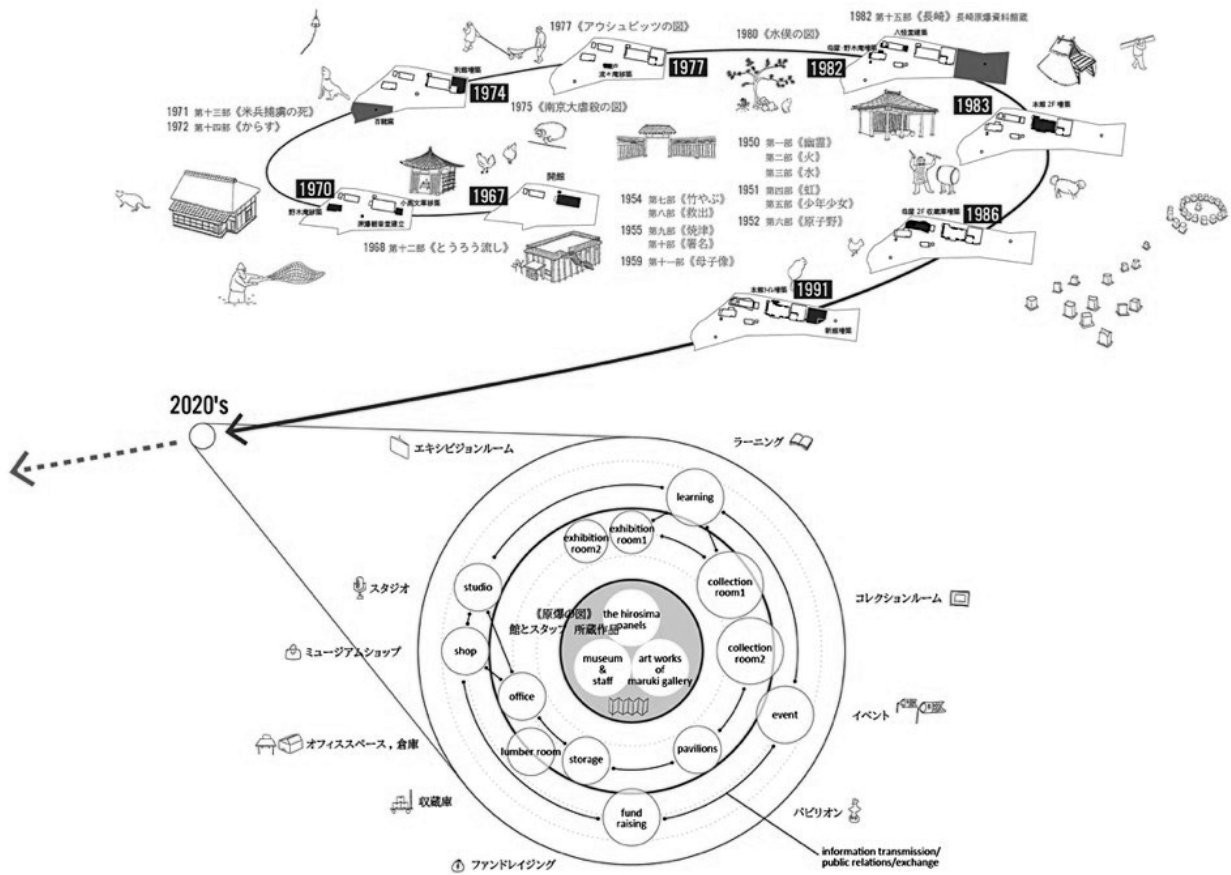
されてきた、と指摘されています。位里は建物を壊すのが嫌いで、増築を手がけた設計者を悩ませましたが、むしろ真つ当な発想だったかもしれない。近代の新築主義以前から受け継がれてきた「豊かな建築文化」のあらわれだったかもしれないと考えさせられました。私たちは、これまで変化を続けてきた、そして今後とも変化していくであろう建築の途中に立ち会っているのだと思います。**齋賀** 私たちが初めて丸木美術館を訪問したのは二〇一九年一月。館内を巡ったあと岡村さんと話して、この美術館は作家、作品、周囲の人びとといっしょに変化してきたのだと理解できました。作家が自分たちで建設し、その後も約五年ごとに増改築して、変化が積み重ねられ



写真左から岡村学芸員（司会）、加藤さん（コメンテーター）、wyes architectsの齋賀さん・八木さん

てきた建築。日本では木造旅館などの例はあるけれども、成長を続ける美術館という話は聞いたことがなかった。これは面白いと直感しました。そして今後も変化し続けていくのだと感じました。**八木** 「原爆の図」の後半や大きな壁画は、美術館の開館後に描かれて、作品ができて展示スペースがなくなってきたから増築を繰り返してきた。なかなか実現できるものではない。それを成し遂げたのが魅力のひとつ

だと感じています。**齋賀** 変化の要素を考え、関係性を再構築することが私たちの設計だと考えています。建築の形で表現することで、今まで生き抜いてきた美術館が次の時代も生き抜くための力になる。それが「変化の途中をデザインする」ことだと考えています。私は文化財の仕事をしてきたので、調査を重視します。破損や劣化の改修より、建物が変化してきた経緯に比重を置いて調査したのが今回の特徴。丸木美術館は他に例のない建築として、文化的な感覚で読み込めるのではないかと思います。**八木** 普通は文化財でもないのに調査が必要と言っても理解してもらえないのですが、岡村さんは重要と覚えてくれました。**齋賀** 調査は成果がわかりにくいので、理解してもらえないのは大きかったです。特殊なことをするわけではなく、今の建物の実測調査や古い図面の読み解きなどを行ってきました。**八木** 昔の写真を探すのも重要です。図面には今は存在しない階段が描かれているんですが、写真には写っていない。もともと整理されているわけではなかった。今回の調査で出てきた写真も結構ありました。



建物の変化の歴史を渦巻き状に描いて整理しつつ、改修で目指す関係性の将来的再構築を同心円状に示すコンセプト・ドローイング (制作: Wyes Architects)

時間の層を見せていく

齋賀 図面を見たときにはわからなかったことに、実際の建築を見て気づくこともあります。五年ごとの増築だと、きっちり計画しているわけではないので、建物に改造や使用の痕跡が残る。それを「変化のかげら」と呼んでいます。これは文化財調査の方法を踏襲しつつ、やや逸脱というか「脱臼」しています。丸木美術館は建築だけでは読み解けないので、より本質的なものをつかまえない。例えば本館南側の階段には、今は使用していない吊り下げ式昇降リフトの痕跡があります。一九八三年の二階増築のときに設置した設備ですが、車椅子の方をどうすれば二階に上げることができるかと考え選択した、丸木美術館にとっての「バリアフリー」の歴史が読みとれる。今後エレベーターを設置するとしても、前史は振り返っておきたい。それが今も建築に残されていることは大事だと思っています。

八木 『丸木美術館ニュース』は重要な資料。「私の丸木美術館」という関係者が思い出を綴る連載があったり、当時の建築周辺の話の記載があり、自分たちで工夫をしながら運営をしていた様子がわかります。

齋賀 事務所の天井裏に上がると、開館時の屋根の鉄骨が残っている。二階を増築して余剰となった空間を物置に使っている。職員にとっては自然な状態でしょうけど、当初の美術館の構造の一部とは認識していません。今はカンパ箱を置いている樽が、昔の写真を見ると展示室で腰かけに使われていたことに気づいたり、「変化のかげら」は建築だけではない。いろんな断片が浮かんでくるけれども、起承転結のある物語が準備されているのではなく、見る側に委ねられているのかもしれない。チューニングをあわせていくと、建築がざわざわしてくる。建物を手当てしながら使っている感覚を、美術館の人たちも楽しんでるんじゃないか。作品と美術館が、分離できないくらい有機的に癒合している。

八木 調査を体験するワークショップも企画しました。美術館で「変なもの」を見つけたら、なぜそうなったのかを想像することが建物に近づく一歩だと思います。

齋賀 丸木美術館は現在も変化を続けている。建物がその変化をどこまで受け入れるかが大事です。岡村さんの著作『未来へ』にあるように、新しい企画によって『原爆の図』が常に読み直され続けることも、これから先に生き抜く上では重要です。

必要な機能を改善しつつ、しかし建物の気配を失えば、新しい作家にインスピレーションを与える魅力が失いかねない。今あるものを生かしながら、次の姿を描きたいと思います。

八木 「変化のかけら」は、当初「手がかり」と呼んでいました。今は隠れている時間の層をはがすように見せていくことを考えています。

齋賀 訪れた人たちの感覚を建築がチューニングすることができるとはならないか。緻密に中途半端な状態を作ろうとしているのかもしれないが、だからこそ次の数十年につながる。「変化の途中」に立ち会ったからこそ、次につなぐことを考えたいです。

美術館そのもの「作品」

加藤 丸木美術館は初めて訪れましたが、美術館と絵画がこれほど密接に結びついているのは世界的にも珍しいと思います。パリのオランジュリー美術館とモネの《睡蓮》も、完成した絵画と完成した美術館なので変化はしません。でも丸木美術館は作品の制作展示と美術館の増築が密接に結びついてきた。美術館そのものも位里と俊の「作品」と言えるのではないか。建物がこれほど豊かに自由自在に変化することを、現代の私たちに教えてくれると思います。

美術館が変化してきた二五年、守ってきた二五年を経て、老朽化という問題が出てきた。しかし、老朽化とは何か、専門家も定義できません。むしろ手を加えれば乗り越えられることを位里と俊は示してきた。歴史的に重要な建物をそのまま残す「保存」ではなく、この建物は未来永劫変化していくけれども、「原爆の図」を次の世代の心に届くように残すことが大事だと思っています。何が変化し、何が継承されるのか、「変化のかけら」から見定めていくのだろうか、とお二人の話を、楽しみだな、と思いつながら聞きました。

岡村 変わらないのは「原爆の図」があること。かつて広島市に美術館ができる話もあつて、結果的に挫折したけれど、その後の公共空間の変質を考えると、独立した場になったのは良かったかもしれない。運営の苦労と引き換えに、自立して考える場が残されたことは、かけがえのないことだと思えます。ところで、変化を続ける美術館の、変化を想定することは可能なんでしょうか？

齋賀 建設当時の姿で存続する建築はほぼないです。例えば耐震補強は必要ですが、将来どうなるかは将来に委ねるしかない。思想などの抽象的な意味ではなく、具体的な確信として変化を想定しています。

八木 作家は亡くなっているので新作に合わせて変化することはないけれども、企画展に合わせた変化の可能性はあるのかなと思います。

加藤 ル・コルビュジエは「無限成長美術館」というコンセプトを作りましたが、彼の設計した国立西洋美術館が螺旋形に増築したかという、新棟を建てた。未来の変化をデザインするのは難しい。素材も技術も常識も変わるの、場当たりの状況を読み解いた方が面白い。「メタボリズム」も新陳代謝のシステムをデザインしようと考えたものの、システム自体が古くなつてうまくいかなかった。「変化の途中」をデザインするのは、建築家として誠実な態度だと思えます。建築は作品性より時間の方が強いですね。

岡村 建築が生き延びるためにも場当たりの変化が重要と言われると心強いです。今後の改修に向けた工夫をご紹介いただければ。

齋賀 変だなと思う例としては、「原爆の図」の間に土偶がある。何の説明もないし、「ノイズ」でもあるのだが、そういう状態こそ丸木美術館の特徴で、残ってしまった変なもののための居場所を「パピリオン」として散りばめたいと思っています。

岡村 空間が変化する余地、融通の効く空間や余白が重要ですね。

加藤 それは未来を考える上で大事なポイントです。デザインされ尽くされていない空間は、美術館のポテンシャルの一つだと思います。

岡村 矛盾がポテンシャルになる点は、位里と俊の共同制作が抱える、合理主義に抗う考え方につながります。位里の母のスマが台所が暗いので壁に窓を穿ってしまったという逸話も思い出しました。ユーモアのある可変性、逸脱の源流かもしれない。**齋賀** 建物を見て笑ってしまうような大らかさは、「原爆の図」とともに大切にしたいと思っています。

加藤 これまでの確かな仕事を拝見しているので期待しています。建築的なユーモアを生かすとしたら、どう生かすのでしょうか？

八木 ちよつとした空間を生かしながら設計して、美術館に来た人たちが「お気に入りスポット」を見つけてもらうようにしたいです。

齋賀 文化財建築のような「公式見解」とは違う個性の発見はセンスが問われ、必ずしも専門家の独占ではない。丸木美術館らしいアマチュアっぽさも表現したいと思います。

岡村 自分の手を動かすアマチュア精神は、丸木美術館が大切にしてきたところ。これからのお二人の仕事に期待しています。

(まとめ…浜地稔、岡村幸直)